



世界 (THE WORLD)

2005(平成17)年12月8日鑑賞(テアトル梅田)



監督・脚本＝賈樟柯^{ジャ・ジャンクー}／出演＝趙濤^{チャオ・タオ}／成泰燊^{チェン・タイシユン}／景珏^{ジン・ジュエ}／蔣中偉^{ジャン・チュンウェイ}／向琬^{シヤン・ワン}／王宏偉^{ワン・ホンウェイ}
ズ・エンド配給／2004年日本、フランス、中国映画／133分

……北京郊外にあるテーマパーク「世界公園」を舞台として、中国の新世代監督の代表格賈樟柯^{ジャ・ジャンクー}が描く中国の若者たちの青春群像。ダンサーとして働く主人公のタオたちには、その華やかさの陰にさまざまな試練が……。日本の若者も閉塞感でいっぱいだが、大同^{ダートン}から北京に出てきた中国の若者たちも、タイトルの持つイメージとは裏腹の「しぼられた世界」の中で、生きていることがよくわかる。いっぱい切ない気持ちになった後は、さて……？

ジャ・ジャンクー 賈樟柯監督に注目！

1970年生まれの賈樟柯監督は、『一瞬の夢』(98年)、『プラットホーム』(00年)、『青の稲妻』(02年)の3本の映画で世界的に注目された中国の新世代監督の旗手。私が観たのは『青の稲妻』^{タイユエン}だけだが、彼の出身地が山西省であるため、3つの作品がいずれも太原^{ダートン}や大同を舞台としていることに私は興味を持っている(『シネマルーム5』343頁参照)。中国では、張藝謀^{チャン・イーモウ}と陳凱歌^{チェン・カイコー}がもっとも有名な第5世代監督だが、第6世代監督の陸川^{ルー・チュエアン}を超えた「第7世代」ともいうべき、注目すべき若手の代表がこの賈樟柯監督であることは明らか。今後も賈樟柯監督の動向に注目する必要がある。

はじめて劇場公開の許可

中国(中華人民共和国)は中国共産党がすべてを支配する国……？ したがって、映画の上映についても、最終的には政府(中国共産党)の許可が必要だが、何と賈樟

柯監督の過去の3つの作品はすべて、中国国内で許可をされておらず、この『世界』がはじめて劇場公開を許可された作品だということから驚き。パンフレットの中にある、「ジャ・ジャンクーが語る『世界』」によると、「2004年に、これまで政府から僕に課せられていた映画製作活動禁止処分が解除されました」とのこと。あらゆる自由に馴れてしまい、自由のもつ価値を自覚することの意義を失いつつある戦後60年の今の日本人たちは、彼のこの言葉の意味や重さをどのように受けとめるだろうか……？

深圳と北京

私は2004年6月に深圳の中国民族文化村にある「ミニチャイナ」を見学し、また、「鳳凰広場」という野外劇場でのショーも楽しんだが、この映画の舞台となったテーマパーク「世界公園」は見学していない。この映画で観る限り、「世界公園」の中にある大劇場は、深圳で観た野外劇場と同じ大規模なもの。そして、深圳の「ミニチャイナ」は中国の名所を10分の1に縮小したのものだが、北京の「世界公園」はその名のとおり、世界各国の名所を10分の1に縮小したもの。もっとも、エッフェル塔だけは3分の1の規模でその高さは約100mとのこと。これは、いつか必ず行って自分で見聞しなければ……。

舞台は大同から北京へ移ったが

賈樟柯監督は山西省の汾陽の生まれで、18歳の時に山西省の省都太原の芸術大学に入ったとのこと。そして、陳凱歌監督の『黄色い大地』（84年）を観て映画に関心を持ち、1993年に北京電影学院に入学したとのこと。そのせいか今回の『世界』の登場人物も主人公以下その多くが太原出身という設定とされている。

この映画の中で展開されるさまざまな青春群像の中で際立つのは、太原という田舎から北京という大都会へ出てきた若者たちが体験する世界の狭さ……。

すなわち、彼ら、彼女らは自由と夢を求めて北京に行き、テーマパーク「世界公園」で働いているにもかかわらず、現実の生活においては、自由な世界に飛び立つことなど夢のまた夢だ。都会と地方、豊かさと貧しさ、勝ち組と負け組という、どうしようもない中国の実態がこの映画の中にはまざまざと……。

この映画をじっと観ていると切ない気持ちになってくるのは、そんな若者たちの姿に直面させられるため……？

青春群像 その1 主人公の2人は？

この映画の主人公は、「世界公園」のダンサーで「お姉さん」と慕われている26歳のタオ。タオを演ずる趙^{チヤオ・タオ}灏は、『プラットホーム』『青の稲妻』に続く出演で賈樟柯監督の大のお気に入り女優……？

このタオの彼氏は守衛主任のタイシェン^{チエン・タイシェン}（成 泰 燦）で、2人はともに山西省太原の出身。タイシェンはタオを追って北京に出てきたのだから、2人の仲は公認のものだし、タオもタイシェンと結婚するつもりみたいだが、なぜか、2人の仲はもうひとつ……？ 中年男の私の目からみると、その「ぎくしゃく感」の原因はセックスについての双方の意識のズレ……？

その矛盾が吹き出したのが、かつてのタオの恋人リャンズーがタオの楽屋を訪れてきた時。これから、モンゴルのウランバートルへ行くというリャンズーをタオと一緒に北京駅で見送ったタイシェンだが、そのハラの中は嫉妬心でいっぱい……。そんな2人が駅前の安ホテルで交わす痴話喧嘩は……？ そして、2人はいつどのような形で結び合うのだろうか……？ さらに2人の結婚は……？

日本人男性の私がビックリするのは、やはりタオの気の強さ……？

青春群像 その2 ニュウとウェイは？

ウェイ^{ジン・ジュエ}（景 珏）はタオの後輩で、「世界公園」のダンサー。そして、ニュウ^{チャン・ジョン・ウェイ}（蔣 中 偉）も「世界公園」の男性ダンサーでウェイの彼氏だが、かなり嫉妬深いタイプ……？ すなわち、「俺のかけたケータイには必ず出る」という、時々見かけるタイプで、ウェイがケータイに出なければ、「どこにいた？」「何をしていた？」「誰と一緒にだった？」と根ほり葉ほり質問する、イヤなタイプ……。したがって、こんな2人の痴話喧嘩が極限までいくと……？ もっとも、そこで終わらないから、男女の関係は面白い。さて、この2人の恋の行方は……？

青春群像 その3 ヨウヨウの場合は？

華やかな衣装で踊るダンサーたちも、建設現場で一生懸命に働き、事故で死亡してしまっただけのように、決して安定した生活と豊かな将来が保証されているわけではない。実態は全くその正反対だ。そんな中、いかにしてのし上がっていく

かが男でも女でも問われることになるわけだが、賈樟柯監督はそんな視点からも、若者たちの実態に迫っている。

女性の場合、1人だけのし上がって行く方法が1つある。それはトップの男性のご機嫌をとり、そこに取り入ること。そんな場合に予想される多少のギセイは……？ そんな考え方をまさに身をもって実践し、異例の早さでみごと次期団長の座を射止めたのはヨウヨウ（向 琬^{シャン・ワン}）だが、さてその「満足度」は……？

青春群像その4 温州出身のチュンは？

洋服・小物を中心とするブランド品をコピーする工房を経営している温州出身の女性がチュン。彼女には夫があり、夫はパリのベルヴィル地区に居住しているため、彼女もいずれはパリに行くことを夢見ている。

そんなチュンがタイシェンと知り合ったのは、チュンの弟の不祥事から。タオとの関係がぎくしゃくしていたタイシェンは、この美しい人妻チュンの魅力に心を惹かれていくが……？

切なさに輪をかけるロシア人ダンサー

中国は全体としてはまだ貧しいが、上海、大連、青島など改革開放政策が進んだ沿岸部の都市や、首都北京の豊かさはものすごいもの。それに比べて貧しく惨めな国になっているのがロシア。

したがって、ロシア人のダンサーは日本にも多数出稼ぎに来ているが、彼女たちの実態は……？ この映画でそんなロシア人ダンサーが「世界公園」に新たに雇われてくるシーンが……。

2人の子供をロシアに残してきたアンナはその1人で、タオと親友になるが、ダンサーとしてだけでは食っていけないため、「世界公園」を出てホステスとして働くことに……。しかし、この場合、ホステスとは一体どんな仕事……？

本当の世界に飛び出せず、「世界公園」の中で悩むしかないタオやタイシェンたちの切なさに輪をかけたアンナたちの姿には同情するものの……？

その他いろいろ……？

この『世界』という作品は、賈樟柯監督には珍しく、133分という長いもの。した

がって、前述の青春群像劇の他にも、いろいろな人生模様がたっぷりと描かれている。それらは当然賈樟柯監督の感性を反映したものだが、そのすべては華やかな大都会北京や「世界公園」のオモテの華やかさとは裏腹の、かなり暗くて厳しいもの……。そんな賈樟柯監督が描く「その他いろいろ」もじっくりと……。

オフィス北野と香川照之

冒頭スクリーン上に“K”のマークが出て「オフィス北野」と表示されたので、「なぜだろう?」と思っていると、この映画の配給にオフィス北野が一役買っていることが明らかに。さすが、北野武監督は目が高い……?

他方、香川照之は、姜文^{チアン・ウェン}監督の『鬼が来た!』(00年)と霍建起^{フオ・ジエンチ}監督の『故郷の香り』(03年)に出演した、個性的で魅力的な日本人俳優。『キネマ旬報』10月下旬号に掲載された、この香川照之と賈樟柯監督との対談は実に内容の濃い面白いものだから、興味のある方は是非一読してみても……。

じっくり観てさらにパンフレットを勉強することが大切!

この映画には主人公のタオとタイシェンの他、多種多様な人物が登場し、さまざまな物語が展開される。しかし、日本人の私たちにはこのすべての登場人物の顔と名前が一致しないこともあるため、物語の意味合いがわかりにくい面もある。しかし、それはやむをえないものだから、1度観ただけでは理解不足の分はパンフレットを読んで勉強することが大切。スクリーン上で描かれる物語にどのような意味があるのか十分わからないままにしたのでは、この映画の面白さや問題提起を半分以上理解できていないことになってしまう。

どんな中国通の人でも、1度この映画を観て100%理解できたといえる日本人は少ないはず。きっとあなたもそうだろうと思うので、映画鑑賞後は必ずパンフレットを買い、その勉強によって理解不足を補いながら、賈樟柯監督作品のすばらしさを味わってほしいものだ……。

2005(平成17)年12月9日記